

けり。但實は吉十郎が刺ける疵、口と腹とに在りけるが、此傷にて死居たりとかや。さて高田へ其獸を引て往き、圖して東都へも注進せり。其名未知と也。形狀たとへばむぐらもちに似て、長五尺ばかりあり。手足さしつまり、首は嘴とがり、目は小さく耳は犬の如く立たり。惣形より小さく、毛は熊の如く色黒し。尾は短く胴も平めて、胸に熊の月の輪の如くなるものありと云。

一、葛巻昌興家僕追放の事

昌興家記
同年五月廿三日卯刻、予眠覺て脇刺を取て蚊帳より起出んと欲する所に、刀・脇指共に枕頭に無之。依て思ふに前夜熟睡の内に爲賊所掠か。日來如斯事心掛の所に、頗る無念の至生涯の恥辱不過之。然れば非所可存命と覺悟す。然共先づ家内を搜索するの所、露路の塀際薄の内に、大小共に刀の下緒にて結び、はばき・切羽をはづし取り、且又板縁に置し草履其邊の松根に有之、彌事の體不審也。依而疑有之家僕兩三輩召籠て、支配頭有賀甚六郎・小泉勘十郎兩人へ、以小簡招之の所、午の下刻勘十郎入來に付則委曲演し、且自殺の覺悟及内談之所小泉云。大事を志す者は如此の小

事に非可_レ以泥、自殺の事は短慮の至也と、古今の例を擧て相示之。但御近習奉仕の身は、如此存念も亦其理あり、有賀へ示談可仕とて罷歸候。申下刻に至り、件の趣聊可懸心頭事に非ず、早速可致出仕旨、兩人より手紙到來に付致登城候處、竊に奉達御内聽の由也。然上は假令傍輩中嘲弄に及ぶと云共、不可存恥辱の旨述之。翌日疑有之三人の家僕一人宛、於閑所遂吟味の所、一人の奴僕白狀す。廿八日件の囚の儀、書付を以て及斷に付、今夜有賀・小泉兩人來示して云。件の囚死刑に付ては、於公事場拷問に及び其上の沙汰たるべし。縦令指を抜ても不可飽候。然共御近習に罷在、彼此事及大儀候も亦不可然。所詮死罪一等を宥して、追放可然やと申聞候。右罪科の趣非餘事の條、罪名落去の上に申請、手自可令殺害と存寄候。然共段々被仰聞候筋も致承服候上は、兎角可任指圖の旨領掌す。依之六月六日上口へ追放に相極め、兩請人召寄段々申合、若於立歸は可爲斬罪旨證文爲調候。七日昨朝追放の僕に差副遣候若黨、歸着仕申聞候は、大正持關所番人へ追放者召連罷越候。斷にも可及やの旨相尋候處、添狀有之やの由申に付、添狀は無之段

申候處、左候へば難通候。然共町奉行村井又兵衛へ、其旨相斷可然由申に付、即刻相越し事の由を申述候處、只今迄公儀は勿論老中其外何方より追放候ても、副狀を以て相通候。先づ科の様子は如何様の趣に候やと、取次を以て相尋候に付、家の法度を背き候由申候處、然らば其差添候者に證文を爲致候て、關所可相通旨申に付、則此者不届の儀有之候に付追放仕候。添狀は不指越候。葛巻仲四郎家來紛無之候。若し以後如何様の事有之候共、罷出嘯可申旨相調へ、又兵衛宛所にて出之候處、先づ是にて可相通候。罷歸候はゞ、關所の儀前々より添狀參申事に候へども、其格御存知無之由。其上證文取置候。殊に此頃本多安房殿より、判形等も彌可有吟味旨被申越候。向後其心得可有之旨、具に可申旨被申候。關所迄町足輕指添候て、被通之候由也。

一、年次と號せる十二律の事

年次と號せる十二律の事。六月廿七日奥御納戸諸色方に、年次の寫と記せる十二律有之候。御覽の上に、是は先年中院殿より板津檢校を以て、此方所持の十二律、故内府殿の時分より御聞及候。當時堂上方にも斷絶候條、被寫置度旨

御懇望に付則被遣候。若し其寫にて候や、表御納戸に件の十二律有之や、可相尋旨被仰出。則御土藏に有之、御奉行持參上之候。其銘に云。

恩徳院住持 詮 藝

名年次

應永十九年八月日敦秋作

抑此十二律は、今於天下音律を可糺に於ては、是を以てせずんばなしがたきの由。先年中院殿へ被遣候時分、被備新院之觀覽之處、希有之物の旨勅諭有之、寫を被留官庫と云。微妙公最御愛玩と云。四辻少將公詔の家老淺野權左衛門光延罷越候に付、年次十二律の事奥村兵部相尋候處、於京都承合候に、槌成記録にては無之申傳候由にて御座候。彼銘に御座候恩徳院は、往昔西八條邊に有之候。彼院破滅に及候て、什物等遍照心院へ集之と云。詮藝は敦秋が兄、敦秋は今豊原筑後守宣秋が先祖國秋が末子と云。又號年次は一年に一竹づゝ切、十二年にして成就す。依て爲稱號と云。於京都も爲名物の旨、其沙汰有之や相尋候處、尤無比類物のよし及沙汰、樂人等も兼て名物のよし存知候由光延